

第48回

通所リハビリでの障がい者ボランティアの活躍について

自律性支援の成否の背景

香川県・綾川町国保綾上診療所

作業療法士 **中村律子**

はじめに

当診療所では、精神障がいや知的障がいを持つ人たちを「引きこもらない生活」の一助になれば、という思いで介護保険事業の通所リハビリ（以下、通所リハ）のボランティアとして参加できるように誘ってきた。今回、これまでの経緯を振り返り、その成否の背景を紹介してみたいと思う。

当診療所は保健センター併設型の診療所である。通所リハは保健センター内にある一室で実施しており、玄関前のエントランスホールに面したところにある。図1のように、歩行練習をする通所リハの利用者とセンターに遊びに来た親子連れが出会うなどということは日常的なことである。オープンな雰囲気の中で行われており、この開放的な風土は利用者以外の者が参加するために効果的であったと考えている。

ボランティアは自律性が必要とされる非常に高度な活動

筆者と看護師は通所リハ実施時間以外は（通所リハは週2回、午前中のみ実施）別の業務に従事している。そのことが通所リハとの垣根が低くなっている要因ともいえる。ボランティアという活動は自律性が必要とされる非常に高度な活動である。アブラハム・マズロー（米国の心理学者）は生きる上で基盤となる欲求が満たされてこそ、より高次の社会的欲求を満たそうとする意欲が生じる、と欲求階層説で協調している。その理論にあてはめてみれば、失敗例の要因が見えてくる。

事例紹介

1. A子さん

はじめて誘ったのがA子さん。彼女はセンターの精

図1



図 2

C男さんの場合
 統合失調症、当時 50 代前半
 退院後「入院中に足が弱った」と言って、センター内を歩行器で歩いている。
 「いっしょに体操する？」と声をかけ、通所リハに参加するようになった。
 なんとなく役割を持ち、細く長く（7年ぐらい）続いた。



図 3

D男さんの場合
 統合失調症、当時 50 代前半
 退院後「低空飛行」状態で安定を保ち、自宅へ「引きこもり」な感じであった。
 自宅への訪問など繰り返し「いっしょに体操する？」と誘い出すことに成功。
 毎週、必ず参加するようになり自然に手伝いをしてくれるようになった。



屋外訓練にでかけたとき、みんなの荷物をリヤカーで運ぶD男さん

神デイケアの活動になじめず、参加が滞りがちであった。自宅への訪問を行い、センターへ来所するきっかけになればと通所リハでの「お手伝い」を提案した。目的ができたことでしばらくは調子よく来所できていたが、ささいなことでつまずき、結局自然消滅してしまった。A子さんは知的障がいに伴う統合失調症で、高校まで通常のクラスで過ごした。これはかなりのストレスと劣等感を持ち続けて生活してきたことが予想された。成人後、保健師のすすめで療育手帳を取得し、現在は知的障がい者としての支援を受け作業所などに通っている。

2. B子さん

次に関わったB子さんは知的障がいに伴うてんかんやヒステリー発作がしばしばみられた。公的な場や作業所などで問題を起こし（感情を爆発的に表出し、自傷行為や物を壊すなど）、「出入り禁止」を増やしている状況だった。祖母の主治医が診療所の医師であったこともあり、頻繁に出入りするようになった。やはり問題行動は起き、多くの人から疎ましく思われている状況を「かわいそうに」と思った同情から、通所リハで

一緒におやつを食べる程度のことから始めることにした。看護師は「利用者への危害」を心配し、この受け入れを反対したにもかかわらずである。

通所リハでは、機嫌のよいときはお茶を出すなど調子よく「お手伝い」ができていたが、ひとたび悪くなると手が付けられない状態になった。保健師と自宅を訪問したり、専門家のアドバイスを受け教育的な関わりを工夫したりした。しかし、同情的でいられるほどの余裕はすぐになくなり、自分の忙しさや苛立たしさに応じた対応という、一貫性を欠いたものになった。結局お手上げ状態になり、通所リハも「出入り禁止」にしてしまったのである。

B子さんとの件は、筆者の対人援助職としてのあり方について猛省するものとなった。B子さんの複雑な家庭状況と自己認知の低さを理解できないまま、安易に誘ってしまった。それがこの顛末である。お互いの未熟さが招いた結果と言えるだろう。

3. C男さんとD男さん

C男さん（図2）とD男さん（図3）は、ともに統

合失調症である。どちらも数か月の入院をしていた。退院後C男さんは、足腰が弱ったと歩行器を使ってセンター内を歩く練習をしていた。D男さんは超ハイテンションだったのが、退院後は安定しているものの、軽い引きこもり状態になっていた。どちらにも「一緒に体操でもしますか？」という程度の誘いで来所を促した。

両名とも自然に通所リハの「お手伝い」としての参加に変化していき、コーヒーの準備やコップ洗い、ちょっとしたトイレ移動の介助などができるようになった。通所リハにとってなくてはならない存在になっていった。そこで、当時県の事業で行われていた「職親制度」（現在は行われていない）を参考にして、1回あたり2,000円の報奨金を出す「有償ボランティア」制度を起案した。ところがC男さんはそのことが「重荷」になったと参加をやめてしまった。これは予想外のことで、C男さんにとって報酬は、「やらなければならない」という義務に変化する要素になってしまったようであった。

ボランティアの成立には「自律的であること」は欠かせない。自ら行動しようとする力が必要である。そのことによって、基本的な心理欲求である「自分で決めたい」「有能でありたい」「人との温かい絆がほしい」の3点が満たされる。C男さんには「報酬＝義務」という図式があり、そこに「自分で決める」ことは同時に存在しなかったようである（表1）。

一方、D男さんは「お手伝いをする中で、ご褒美

がもらえる」と判断したようで、自律的な取り組みを後押しする結果になった。しかし「時給いくら、というほどになることは望んでいない」のだと述べている。働きに対して「報酬」が発生するのは当然のことと考えていたが、自律的な取り組みに対する「報酬」は実はとてもデリケートなものであると実感している。

4. E男さん

現在、知的障がいがあるE男さんが参加している。E男さんの母親に訪問看護として関わっていたのがきっかけである。今まで受けたことがなかった住民健診をすすめたり、一般住民向けの運動教室へ誘ったりして外部の人との接触を増やしていった。E男さんはわれわれが思っていた以上に対人関係が良好で、教室終了後はその運動教室のお手伝いに来るようになった。その後、通所リハへもお手伝いに来てほしいと誘ってみるとスムーズに参加ができた。今年度からは有償ボランティアとして参加している（図4）。

表1 内発的動機と外発的動機の分類

分類の観点	動機	
	内発的動機	外発的動機
目標－手段	学習が目的 ※面白いから学ぶ	学習は手段 ※ご褒美が欲しいから学ぶ
自律－他律	自律的な取り組み ※自ら進んで学ぶ	他律的な取り組み ※やりなさいというので仕方なく学ぶ

図4

現在、E男さんが活躍中。
知的障害、現在60代前半。
数年前、E男さんの母親の訪問看護師として自宅を訪れていたのが協働演者。母親は施設へ入所したため、訪問は終了。
その後もE男さんは、わたしたちを尋ねて頻りにセンターへ来るようになった。



住民健診や一般の運動教室の利用をきっかけにしてその後の受け皿として通所リハビリでの運動参加をすすめた。
通所リハビリでは、持ち前のまじめさを存分に生かし頼りになるボランティアとして活躍中。

表2 ボランティアをすることは自分にとってどのような意味がありますか？

<ul style="list-style-type: none"> ・人の役にたつことに喜びを感じない。 ・嫌になった。出かけたことは楽しかった。 C男さん
<ul style="list-style-type: none"> ・家に閉じこもりすぎず、生活リズムができるのでいい。外部との接触ができるのがいい。 ・週に1度というのがちょうどいい。 ・役割があるので、毎週来る気になれる。 D男さん
<ul style="list-style-type: none"> ・ここに来ると、みんなが笑っているので安心する。 ・自分の失敗も怒られたりしない。 ・毎週来ることが、楽しみだと感じている。 E男さん

表3 今後について

<ul style="list-style-type: none"> ・またしようとは思わない。 ・ひとつのことで手一杯 C男さん
<ul style="list-style-type: none"> ・（現在、内科的な疾患で治療が必要な状態にあるので）今後のことがちょっと自信がなくなった。 ・続けていくことができるかどうか不安。 ・この病気のことに、みんなが関わってくれる、頼りにしている。ありがたいと思っている。 D男さん
<ul style="list-style-type: none"> ・雨が降ったら来れないが（移動は自転車なので）できるだけ来ようと思う。 ・いろいろと頼まれごとをすることは嫌ではない。 ・「できんことはせんで」とクギをさされた。 E男さん

C男さん、D男さん、E男さんに簡単なインタビューを試みた。「ボランティアをすることは自分にとってどのような意味がありますか？」という問いに対して、表2のような回答があった。D男さん、E男さんには通所リハの中に役割を持ち、来る意味を見いだせていると感じられる。「今後どうしたいですか？」の問いには表3のような回答があった。自分のことを気遣ってくれるスタッフのやさしさは、居心地のよい場を作り出していると思われる。

ボランティアは 基本的心理欲求を満たす行動

通所リハへの受け入れ後は、参加するしないをはじめとして、本人の自由にまかせてきた。前述した3つの基本的心理欲求が充足されることは、精神的健康が導かれると言われている。まさにボランティアとはこ

図5

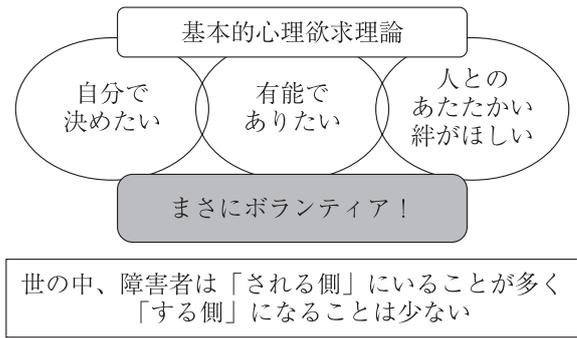


表4

自律的というのは「自由に自発的に行動すること」であり「その人が本当にしたいことをしている」ということ

れらを満たす行動といえる(図5)。これは障がいのあるなしに関係のない定義であるだろう。障がいを持っていても、基本的な欲求が満たされた人たちは、ステップアップするべきだと考えるが、障がい者はいつも「される側」にいることが多く、「する側」になることが少ないのが現状である。与えられた場ではなく、自律的な行動で有能であると感じられることは非常に大切なことだろう(表4)。

そうはいうものの、「やってみなければわからない」のが本音である。失敗しながらともに成長していく場もお互いに必要なのだらうと感じている。現在進行中のD男さんとE男さんとは末永くともに進んでいきたいと思う。

●参考・引用文献

1. 櫻井茂雄(2009)自ら学ぶ意欲の心理学-キャリア発達の視点を加えて、有斐閣
2. Deci,E.L(1980) The psychology self-determinaion, D.C.Health&Company. (=石田梅男訳「自己決定の心理学-内発的動機づけの鍵概念をめぐって」誠信書房
3. 今枝史雄、他(2017)成人期知的障害者の自己決定と問題解決能力との関連からみる学習支援：先行研究を通じた検討、東京学芸大学教育実践研究支援センター
4. 藤原善美(2012)信州豊南短期大学紀要、基本的心理欲求観の関係と目標内容に関する展望、29,71-97